主 文

本件再審査請求を棄却する。

事実及び理由

第1 再審査請求の趣旨

再審査請求人（以下「請求人」という。）の再審査請求の趣旨は、労働基準監督署長（以下「監督署長」という。）が平成〇年〇月〇日付けで請求人に対してした労働者災害補償保険法（昭和22年法律第50号）による障害補償給付の支給に関する処分を取り消すとの裁決を求めることにある。

第2 事案の概要

- 1 請求人は、平成〇年〇月〇日A所在のB会社C営業所（以下「事業場」という。）に採用され、バス運転士として勤務していたところ、平成〇年〇月〇日、バスターミナルにおいて、マイクロバスを洗車中、車止めに躓いて転倒し、負傷した（以下「本件災害」という。）。
- 2 請求人は、同年〇月〇日、D病院に受診し「右大腿骨大転子骨折」と診断され、その後、療養を続け、平成〇年〇月〇日に治癒（症状固定）した。
- 3 本件は、請求人が、治癒後、障害が残存するとして、障害補償給付を請求したところ、監督署長は、請求人に残存する障害は労働者災害補償保険法施行規則別表第1に定める障害等級（以下「障害等級」という。）第12級に該当するものと認め、同等級に応ずる障害補償給付を支給する旨の処分（以下「本件処分」という。）をしたことにつき、本件処分を不服として同処分の取消しを求める事案である。
- 4 請求人は、労働者災害補償保険審査官（以下「審査官」という。）に対し審査請求をしたところ、審査官が平成〇年〇月〇日付けでこれを棄却する旨の決定をしたことから、更にこの決定を不服として本件再審査請求をした。

第3 当事者の主張の要旨

- 1 請求人
(略)

2 原処分庁

(略)

第4 争 点

請求人に残存する障害が障害等級第12級を超える障害であると認められるか。

第5 審査資料

(略)

第6 理 由

1 当審査会の事実認定

(略)

2 当審査会の判断

請求人に残存する障害として検討すべきものは、請求人の自訴及び医学的見解等からみて、①右股関節の機能障害、②右下肢の変形障害及び短縮障害、③右大腿部の神経障害であるので、以下検討する。

(1) 右股関節の機能障害について

E医師は、平成〇年〇月〇日付け労働者災害補償保険診断書（以下「診断書」という。）において、要旨、「傷病名は右大腿骨大転子骨折で、既往歴として右大腿骨転子部骨折があり、右股関節の屈曲自動30°、同他動45°、伸展120°、外転5～10°と測定し、可動域制限がある。」としている。

これについて、診断書を追記したD病院は、同年〇月〇日監督署受付の回答書において、要旨、「可動域制限に関しては以前（昭和〇年頃）の骨折の影響が大きく、今回（平成〇年〇月〇日）の骨折がどの程度関与しているのか評価は困難であるが、今回の骨折の影響はないか、あってもわずかであると考えられる。」と述べている。

上記の診断資料等を確認したF医師は、同年〇月〇日付け意見書（以下「意見書」という。）において、要旨、「右股関節部の可動域制限に関しては、今回の受傷前から高度の可動域制限があったものと予想され、受傷部位の画像等から判断すると、今回の受傷により、多少動きにくくなったものと考えられる。」と述べている。

当審査会としては、同医師の意見は医学的に妥当であり、決定書理由に説示するとおり、右大腿骨大転子骨折の影響が、右股関節の機能障害について、障害等級の変更該当する程度の障害を与えたとは認められないと判断する。

(2) 右下肢の変形障害及び短縮障害について

E医師は、平成〇年〇月〇日付け身体障害者診断書・意見書において、要旨、「右変形性股関節症は、昭和〇年頃の交通事故での右大腿骨近位部骨折が原因と考えられる。」と述べている。

また、同医師は、診断書において、要旨、「右大腿骨近位部の骨折部は骨ゆ合している。ゆ合不全がない。」としていることから、「偽関節を残す」とは認められないものと判断する。

さらに、F医師は、意見書において、要旨、「右大腿骨大転子骨折に係る障害等級表上にある下肢の変形障害や短縮障害は認められない。」と述べている。

当審査会としては、これらの医師の意見を考慮すると、決定書理由に説示するとおり、右大腿骨大転子骨折の影響が右下肢の変形障害や短縮障害について、障害等級の変更該当する程度の障害を与えたとは認められないと判断する。

(3) 右大腿部の神経障害について

F医師は、意見書において、要旨「今回の受傷に伴って、動作による負荷が掛かると神経痛に似た痛みが生じており、通常の労務に服することはできるが、時には強度の疼痛のため、ある程度差し支えがあるものと認められる。」と述べている。

当審査会としては、同医師の判断は妥当であり、決定書理由に説示するとおり、請求人には右大腿部に痛みが残存するものの、その神経障害の程度は「局部にがん固な神経症状を残すもの」（障害等級第12級の12）に該当するものであると判断する。

(4) したがって、請求人に残存する障害は、障害等級第12級を超えるものとは認められない。なお、請求人のその余の主張についても子細に検討したが、上記判断を左右するものは見いだせなかった。

3 結 論

以上のとおり、本件処分は妥当であって、これを取り消すべき理由はないから、請求人の本件再審査請求を棄却することとして、主文のとおり裁決する。